

— 民族のこころ (146) —

民博所蔵西夏語文献調査始末

荒川 慎太郎

小生は西夏語・西夏文字で記された文献を調査・研究している。西夏は11～13世紀、中国西北部に存在した国家である。小生のフィールドが中国内陸、あるいはイギリスなどだろうと見当をつける方も多い。しかし少なくとも現在まで、渡航回数が最も多いのはロシアである。詳しい説明は省くが、同国が質・量共に一級の西夏語文献コレクションを持つためである。そんな小生には珍しい、「国内」調査の思い出と、文献調査の実態(?)を記しておこう。

日本国内にも若干であるが西夏語文献が存在する。

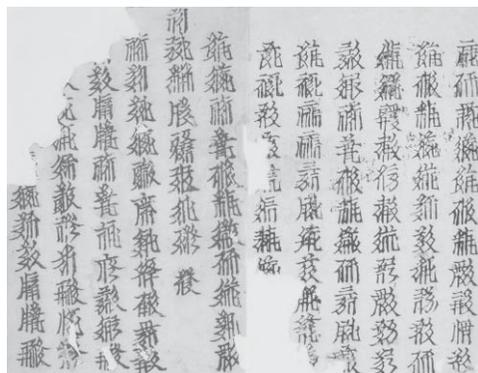
しかしそれらのほとんどは西田龍雄先生、松澤博先生が精査されていたので、これまで小生は国内での調査活動にあまり従事してこなかった。そんな小生があるとき、国立民族学博物館所蔵の西夏語文献について意見を求められた。同館には故中西亮氏コレクションの西夏語文献が4点所蔵されている。3点は碑文拓本(一種の複製品)であり、すぐに、西夏語・西夏史の研究者には馴染みのものであると判明した。もう1点は印刷物の断片であり、わずか2頁分(1頁6行、11字詰。西夏文は右から左に書かれる縦書)ではあったが、日本では貴重な、オリジナルの資料である。

同館のご厚意でこの断片の写真をいただき、さっそく内容を調べてみた。写真で見ると、左頁の2行目に、経典の略題、章題に相当するもの、西夏語の「終わり」という文字がある。小生に既知の文献ではないが、内容比定は「楽勝」と思えた。略題から正式な経典名は予測できたし、「章題+『終わり』」という形式から、チベット語経典から訳された文献と目星をつけた。はたして、チベット語のある経典に、この章末部分、章題、次の章冒頭の西夏語と対応する箇所を見出すことができた。

問題は右頁の対応だった。チベット語辞典をたどって繰り返しながら、章末部分を終わりから遡るようにして読んでいったが、どうしても西夏文右頁の内容と合わないのである。馴れないチベット語経典を、延々と、それも遡るように読んでいくのは一苦勞だった。とうとう経典冒頭まで目を走らせたが、一致する箇所がない。小生のチベット語の読解に致命的な誤りがあったのだろうか?あるいは内容比定そのものが誤りで、略題・章題の類似する別の経典だったのだろうか?疑心と不安にかられながら、今度はひとつ、次の章「以降」のチベット文を読んでみることにした。すると、西夏文右頁と内容が一致する箇所があるではないか!

判明すればどうということもない結論だが、この2頁はそれぞれ別の章の一部であり、内容の後関係までが逆だったのである。後に同館で現物を確認したが、資料整理のどの時点かで、異なる断片を連続しているかのように貼り合わせてしまったものと判った。写真には、右頁の最終行に数文字の欠損があったのだが、最初これを見た時点で資料の断裂の可能性を考慮すべきだったのだ(ちなみに左頁1行目には文字の欠損はない。もし連続する断片なら、こちらも数文字は欠損・摩滅が見られるのが自然だろう。後になって気づいたことであるけれども)。今にして思えば、早めに同館で資料を実見すべきだった。

この調査をもとにした論文では結果のみを淡々と記したが、調査自体は失敗の連続であった。何故か、同時に鑑定・調査を依頼された「契丹文字」文献の内容比定でも、小生はミスを連発して大恥をかいたのだが、幸運にもそれを記す字数は残っていない。



中西コレクションデータベース—世界の文字資料— (<http://www.minpaku.ac.jp/database.html>)にて公開中。